

令和 3 年 6 月 15 日現在

機関番号：43701

研究種目：基盤研究(C) (一般)

研究期間：2018～2020

課題番号：18K04550

研究課題名(和文)「創生型」町並み色彩計画の研究

研究課題名(英文) Study of the generating approach for townscape color planning

研究代表者

柳田 良造 (Yanagida, Ryozo)

岐阜市立女子短期大学・その他部局等・名誉教授

研究者番号：70510460

交付決定額(研究期間全体)：(直接経費) 1,900,000円

研究成果の概要(和文)：アイルランドで町並み色彩調査等をもとに「創生型」町並み色彩計画の研究成果として啓蒙書『色を使って街をとりもどす』(学芸出版社、2020年3月31日)を上梓することができた。その内容はルネッサンス以降、建築学が見失ってきた色彩世界を建築実体に即して再発見し、建築家B・タウトなど色彩を設計デザインのテーマとした考え方が近代建築においても色彩が風土性の表現につながるものであることを明らかにしつつ、美しい町並みとは何かを探り、自生的秩序としての町並み色彩の可能性と重要性を描き出している。そこから建築と町並みの実体から捉え直す町並み色彩計画とその実践を提起している。

研究成果の学術的意義や社会的意義

従来、我が国での町並み色彩の研究ならびに町並み色彩計画の考え方が、実体としての建築物や町並みと切り離され、認知科学としての「色彩論」に基づき一元的に分析され計画されていた状況に対し、はじめて実体としての建築物や町並みをもとに町並み色彩を考える分析手法、計画の考え方を提起できたことは学術的にもインパクトをもたらすものになったと考えている。『色を使って街をとりもどす』を上梓後、東京、大阪など3都市で講演会を開催し、新たな町並み色彩の手法を発信することで、社会的な反響を得たが、さらに2021年4月には著作が不動産協会賞を受賞し、社会的評価を確立しつつある。

研究成果の概要(英文)：In basing the cityscape's color investigation in Ireland and others, I pushed forward a study. As a result I was able to publish enlightenment book "Take back your city with paint" (Gakugei publishing company, March 31, 2020). The content is to have found out a method to rediscover the color world that architecture lost sight of in line with building substance the Renaissance later. I clarified that a way of thinking that the design featured the theme of a color in the modern architecture such as architect B. Taut led to expression of the endemism. I investigated something with the beautiful cityscape and drew possibility and the importance of the cityscape color as the order of growing wild, and I bring up a cityscape color plan and the practice regarding as a building from substance of the cityscape again from there.

研究分野：都市デザイン

キーワード：町並み色彩 コミュニティ 町並み色彩計画 自生的秩序 課題発見型イベント

様式 C - 19、F - 19 - 1、Z - 19 (共通)

1. 研究開始当初の背景

応募者は「環境の教育力による函館西部地区での町並み色彩まちづくりの実践」で2017年度日本建築学会教育賞を受賞した。函館やポストン等での町並み色彩研究のユニークな手法である「こすりだし」と「生活知」調査、町並み色彩まちづくり基金の創出とペンキ塗りボランティアの活動など一連の実践活動の成果を評価されたものであったが、その研究過程で我が国の町並み色彩での研究とそれに基づく町並みの計画的政策が、世界的に見てかなり特殊なものであり課題を抱えるものであるとの認識に至った。本研究は我が国の「規制」前提の町並み色彩研究の考え方に対し、町並み色彩が本来、都市のキャラクターを強め、都市景観の魅力を生み出し住民の都市での暮らしを豊にするものであるという原点に立ち返り、また町並み色彩が住民の自立的なまちづくりを推進する大きな要因になるというまちづくりの実践論に立脚し、「創生型」の町並み色彩計画のあり方をさぐるものである。

2. 研究の目的

研究の目的はまず、都市の町並みの美しさとは何か、そこでの色彩の役割とは何か、それは地域の住民にとってどういう意味をもつかという点に立脚し、町並み色彩がコミュニティの環境改善を惹起する重要な要素となりうるものとして位置づけることを研究の出発点とする。その研究視点は、歴史的に都市における町並み色彩の役割、意味を探りだすことにあり、続いて函館での色彩まちづくり運動と類似し近年カナダのセントジョンズやアイルランドのキンセールなど地域で勃発している住民の自主的な町並み色彩づくりムーブメントが、どうい背景で、どう展開し、地域の取り組みとして発展してきたのかを現地調査等からさぐり出す。それらの調査をもとに「創生型」町並み色彩計画の可能性と必要性を明らかにし、その計画の考え方を構築することを目的とする。

3. 研究の方法

具体的な調査と研究内容は以下の3つである。

コミュニティでの町並み色彩の起源と展開の分析調査

都市の町並み色彩がいつ頃から、どのような背景のもと、塗られ始めたかを明らかにする。対象としては都市の町並みで、レンガ造や石造の組石造に漆喰、モルタル仕上げし色彩を施すものと、木造下見板に色彩の建物に分けて調査する。調査は文献資料や過去の時代に描かれた風景画の分析、ならびに現地調査を基に行う。組石造の色彩建物群の調査は文献や過去の風景画等、資料の状況を探査し、2都市程度を選択し、現地調査を行う。木造下見板の建物群での町並み色彩調査はイギリス、北欧から1, 2地域を選びに文献資料調査並びに現地調査を行う。調査では函館で開発した「こすりだし」調査と「時層色環」による分析を行い、函館での再調査も改めて実施する。

近年の世界各地での町並み色彩ムーブメント調査

カナダ東部のカナダのセントジョンズ、アイルランド南部のキンセール等の小市街地、ケープタウン市のボーカブ地区などを対象にして近年の世界各地で勃発する町並み色彩ムーブメント調査を行う。これらの事例で、町並み色彩ムーブメントがどういう経緯で、何を目的に、リーダーやアドバイザーの存在、色彩選択の手がかりやルール、行政の役割など、色彩まちづくりの展開過程を明らかにする。また町並み色彩に関する地域の「生活知」の存在についても検証する。

「創生型」の町並み色彩計画のフレームの考え方

これらの調査分析をもとに都市の町並みにおける色彩とは何か、地域の住民にとってどういう意味をもつかを前提に、コミュニティの環境改善を惹起するものとして「創生型」の町並み色彩計画のあり方をさぐる。「創生型」の町並み色彩計画のフレームとしては、地域固有の生活環境色彩を基盤として、住民が地域にふさわしい町並み色彩を主体的、社会的に評価・判断できるしくみ、住民の自由な自己表現が発露するようなシステムを想定し、計画を構築する。

4. 研究成果

コミュニティでの町並み色彩の起源と展開の分析調査での成果

1) 建築の歴史と色彩

建築学での色彩について、まとも論じられた本はほとんどなく、建築学科でも色彩を学ぶ機会はないと言ってよいといえる。建築学における色彩は長く、忘れられてきた分野である。歴史的にその背景をたどってみたい。

最古の建築理論書と言われるローマ時代の建築理論家ウィトルウィウスの著した『建築書』の第七書の中に、壁仕上げとして大理石の粉を混入したモルタル(スタッコ)工法を示したのちに、色彩についての記述がある。壁に塗る顔料について、朱、黒、インドア藍、鉛白および緑青、貝紫色、紫色などの各色に言及し、その作り方が詳しく述べられている。特に朱について外部に使う時の色質を保つ方法として、乾いた時に油を塗り、蠟で艶出しすることも述べられている。ギリシアの神殿もかつては多色彩色(ポリクロミー)されていたことが知られるが、当時から壁の塗装に関しかなりの必要性のあったことが伺える。

近代の建築美術を制度化しアカデミーのもとになったボザールでは、十七世紀以降、絵画での形態か色彩かの論争がおこるが、大勢は形態こそが理性的なおこないであり、色彩はそれに従属するものとして、形態優勢に終わる。さらに十八世紀後半に入り、考古学の発掘調査の新知見からギリシア神殿に創建時には色彩が施されていたということがわかり、建築においても形態か色彩かの論争が起こる。彩色されたギリシア神殿の美しい図面なども発表されるが、長年、ギリシア神殿は白いものと思われていた固定観念は覆らず、白い大理石の形態こそが至高のものであるという形態派の勝利に帰着する。結果二十世紀の近代建築の誕生において、幾何学的形態の追求は色彩を語る余地などない方向に進む。しかし実際はデ・スティル、アスプルド、ル・コルビジエなど近代建築を推進した建築家には、彼らの空間を特徴づける形態の中に色彩が巧みに使われているのを見ることができる。

建築空間での色彩を明確に手法として活用した建築家にブルーノ・タウトとルイス・バラガンがいる。ブルーノ・タウトは一九一九年(大正八)「色彩建築への呼びかけ」を発表し、灰色の石造建築の歴史によって忘れられてきた色彩ある建築の復活を宣言し、実作においても一九二〇年代のベルリンで、ジードルングの建設で彼の色彩建築を実践する。馬蹄形の住棟が有名なブリッツ・ジードルングは住棟に巧みな色彩が施されている。長辺が二〇〇mに近い巨大な四層の馬蹄形の外側は全体が灰色がかったアイボリーで、階段室入口や中庭への通路などのエッジには煉瓦が建物を分節化するように使われ、階段室上部や、庇の下の四階部分、バルコニーの内部には青色が塗られている。庇の下に塗られた青色は、陽のあたり方で異なる色合いに見える。また馬蹄形の周りに建つ三層切妻屋の住棟群は、エッジ部分に煉瓦が使われているのは同様だが、住棟の壁面ごとに赤褐色、オレンジ、アイボリーに塗り分けられ、さらには一軒ごとに薄緑、オリーブ緑、黄土色、アイボリー、群青、青などに塗り分けられている住棟もある。タウトは太陽の日差しの中で色彩が人間の目にどのように映るかによって、建築色彩の考え方を構築した。曇り空の弱い太陽光線の中でも黄色の面はあたかも柔らかい陽射しが降り注いでいるかのように見え、オリーブ緑の面は陽射しに対しくっきりとした陰影をつくりだしている。タウトは午前光は弱く冷たい、午後光は強く暖かい、という自然の条件を前提にして、面ごとに異なる色彩で塗装する色彩理論を実践したのである。このジードルングの色彩について、バルト海沿岸の伝統的な町並との類似性を指摘する分析がある。タウトはバルト海沿岸のケーニヒスブルグ出身で、育った風土と彼の建築色彩の表現にはつながりがある。タウトも「かつては至るところにあった色彩の伝統が失われてしまったが、色彩にあふれた建築をとりもどさなければならない。」と記している。色彩が見るものにそれぞれの意識や想像力のなかで、飾りやレリーフのような建築装飾、また自然の風景へと変換されることによって彼の「色彩の空間構成、色彩の建築」が成立したのである。

ピンク色の壁で強烈な印象を残すメキシコの建築家ルイス・バラガンがいる。彼の設計方法の特徴は、彼自身は平面図や立面図のような建築図面は画かず、透視図的なスケッチをもとに工事現場へ頻りに訪れながら建築空間を考えていったことだと言われる。彼の設計手法である空間を切り取るフレーム、絵画的風景を構成する壁の独立性と自立性、奥行を生み出す重層的な空間構成を、壁や天井にピンクや紫、赤、黄色など鮮やかな色彩をまわらせ生み出していった。意図された場に強い印象と残像の残る色彩をつくり、受け取る快感や色のもつ活力に人びとを目覚めさせた。彼の建築に使われた色彩、ピンクはブーゲンビリアの花、薄紫はハラカンダの花、赤はタバチンの花、赤錆色と黄土色は土の色、青は空、メキシコの自然、植物、風土からみずからの建築につかう色を抽出し、住む人びとのアイデンティティにメキシコでの風土を、色を通して語りかけた。

インターナショナルスタイル、世界のどこでも同じスタイルの建築への抵抗のひとつとして、建築における色彩が地域性や風土性を表現する大きな武器になりうるのではないということを、タウトとバラガンの軌跡は示している。

2)町並み景観と色彩

建築家の山本理顕はハンナ・アーレントを引きながら、古代ギリシアのポリスでは都市の公的領域と私

的領域の間に、家に属しながらポリスに開かれ、他の市民を招き入れ法や政治を語りあう場でもあった中間領域の存在、その建築的現われが、アゴラとともにポリスが自由と平等の場であることの証しとなっていたと書いている。ポリスに暮らす市民集団にとって、都市、家という人間の手によってつくられた建築空間こそが「法」という共同生活のための規範の根拠となったのであり、「法」が先にあり「法」にもとづいて建築空間がつけられたのではなかった。アーレントの「物化」の概念、「思想はそれが「物化」されることによってはじめてそこに住む人びとによって共有されるものになるのである」。その場所に住むという地形や立地性、全体と個々の家の関係とつながり、どういふ暮らしを営むかという建築の形や使われる素材はそこに住む人びとの思いと暮らしが「物化」されたものである。景観の中での個々の建物の色彩も、思いと暮らしが「物化」された重要な要素のひとつである。

3) 景観をつくる仕組み

今回の調査でイギリスで最も美しいと言われるブレッジのミルトン・アッバスを訪れた。ブレッジとは地主階級の農場で雇用した農業労働者のための住宅(コテッジ)が集めた場所である。ミルトン・アッバスは一本の街道に沿い両側にコテッジが並ぶ路村である。サイトプランではそれぞれの敷地は、奥行きが深いロングロット(短冊型)の形態であるが、住宅のバックヤードは地形的に急斜面になっていて全体が丘陵で囲まれた地形である。そこに別世界のような町並みが形成されている。ミルトン・アッバスは十八世紀後半につくられたもので、特別古いブレッジではないが、現在もまったく変わらず美しく維持され、玄関ドアや窓枠は一軒ごと異なる色に塗られている。バックヤードは菜園、子供の遊び場や庭園になっているが、訪れた時も住人が、急斜面での庭の造作に精を出しているのが見られた。長い間、同じ光景が繰り返され、この場所に住むことに満足し、これからもそれが続いていこうと思わせられるものであった。景観の美しさとは、その場所に住むことに喜びと誇りを持ち、これからもここに住みつづけたいと思い、しかもその思いが保証されるという社会的仕組みが確保されるなかで、生まれるものだと感じるものであった。

経済学者のハイエクはデカルト以来の近代合理主義が生み落とした計画主義(設計主義)的思考に対し、歴史過程において習慣、伝統、言語など人間の行為の意図せざる結果としてできあがった秩序(「自生的秩序」)を社会システム上の最も重要な構造と捉え、その価値を強く主張した。自生的秩序は、何らかの意図を実現するために個人や集団が意識的・計画的に作り出したものよりはるかに精巧で、社会の真の発展を支えてきたのである。共同体における町並みも住民が地域の素材や風土条件をもとに、長い時間をかけた近隣関係の中で生み出してきた自生的秩序としてある。色彩は共同体の存在表象であり、文化現象である。

近年の世界各地での町並み色彩ムーブメント調査での成果

地域の住民も参加した函館での色彩研究から高齢化で町家の維持が困難になった建物の外壁の塗り替えサポートを行うボランティア隊の活動が生まれることになるが、同様の取り組みを探っているなかで、町並み色彩ムーブメントとも言えるまちづくり運動の存在を知ることになった。一九八五年に応募者が調査で訪れたカナダ東部のセントジョンズ市は、その町並み色彩が近年大きく変わっている。建物の下見板、窓周りや軒などに鮮やかな色が塗られ、華やかになった中心市街地の町並みはジェリー・ピーン・ロウの愛称で呼ばれ、観光地としても注目を集めつつある。その町並み色彩の変容を調べると、一九七〇年代後半に、衰退した中心部の歴史的な木造タウンハウスの再生のため、地元の歴史財団が中心となりある街区を対象に、町並み外観をカラフルな色に塗り替え、アーティストが内部空間を活用するリニューアル実験プロジェクトを行ったことが判った。この活性化プロジェクトが御披露目され姿を現したところ、カラフルな町並みの出現に周りの住民が驚き共感し、自分の家も華やかな色彩へ塗り替える現象が次々に起こった。感冒の流行のように拡がっていったそれは、地元の行政がガイドラインを示し指導したものでなく、中心部の歴史的地区のリニューアル再生に共感した住民が、自らの家を塗り替える町並み色彩づくりを進めた結果なのであった。

セントジョンズ市の事例から読み取れることは三つである。第一は町並み色彩が都市のキャラクターを形成する大きな要因のひとつになり、色彩豊かな町並みが観光名所にもなったことである。近年の傾向だけでなく、もともとサンクトペテルスブルグ市などロシアの水色や黄色、緑色のパステルカラーの建物壁面の町並み、東欧やオランダなど都市の広場に面した建物の鮮やかな多色の町並み、トリノ市の黄色の町並み、港町ベルゲンの多色な町並みなど、色彩的特色を有する事例は枚挙にいとまがない。世界的にみて特色ある色彩的キャラクターをもたない都市の方が少数派といえるほどである。二番目が町並み色彩は「コミュニティの色彩」ということである。色彩を含めた町並み景観は、ヨーロッパなどでは都

市として長い伝統をもつコミュニティ(地域共同体)の表象であり、地域のアイデンティティや住民の誇り、自己表現の反映として存在するものである。三番目が近年の華やかな町並み色彩形成は行政が指導したものでなく、住民が実験的な色彩プロジェクトに共感し、自己表現として色彩によるまちづくりムーブメントを進めた結果である。このような事例はアイルランド南部のキンセールなどの小都市群、ケープタウンのポーカープ地区、リオデジャネイロのファベラ、アルバニアの首都ティアラなど、多数あげることができる。

ティアラでは、長く政治的経済的混乱の続いた後、市長に就任した元画家の人物は荒廃した都心部を復興するために、限られた予算の中で公共空間を不法占拠していた建物を撤去し、陰鬱な灰色の建物を鮮やかな色に塗り直した。建物に鮮やかな色彩を使った町並みと公共空間の回復は、人々が忘れていた街に対する思い、帰属意識を呼び覚ました。長年抑え込まれていた市民の感情があふれ出て、街のいたるところに色が現れ、雰囲気が変わると人々の意識にも変化が生まれはじめた。建物の壁を塗り替えた鮮やかな色彩は子供に食べ物を与えた訳でも病人を看病したり、教育を与えたりした訳でもない。しかしそれは住民に希望と光を与えた。その光が見せたのは、これまでと違う気持ちで生活ができるということ、街の暮らしと生活を良くすることができるという、希望である。本研究の成果として出版した著作のタイトル『色を使って街をとりもどす』はティアラ市再生の物語の講演"Take Back your City with Paints"から取られている。

「創生型」の町並み色彩計画のフレームの考え方での成果

町並み色彩を従来の自然環境色彩と近代科学色彩による二軸で組み立てられたものに対し、生活環境色彩を加えた三軸によるフレームを設定する。その三軸のフレームに、ベクトルとして創造性をくわえた力で計画をとらえた。

広域の行政単位ではなく、狭域の地域コミュニティを単位とする。そこでは現状の把握だけでなく、その地域の歴史、文化や住民の生活、意識がどのように町並み色彩に反映しているのかをとらえることが必要である。各地での時層色環の分析からわかるように、生活環境色彩としての町並み色彩は普遍的、固定的、永続的なものではなく、住民の生活や時代背景、技術などの流れに対応しながら変化するものである。したがって、町並み色彩計画も固定的なものではなく、変化を許容するものが求められる。

町並み色彩計画において、従来の自然環境色彩と近代科学色彩に生活環境色彩を加えることの意味は、生活環境色彩が地域の歴史、文化や地域住民の生活とその意識にかかわっているために、住民が町並み色彩を身近な、親しみ深い生活風景としてとらえることができることにある。したがって、地域住民が町並み色彩への関心を高めやすく、また生活環境色彩をとらえて住民が地域の価値を再発見することもありえる。そこに町並み色彩の問題が地域住民にとって自分自身の問題としてとらえられる契機があるといえる。町並み色彩を形成し、維持するのはあくまでも地域の住民一人一人であり、彼らが色彩の問題をいかにして自分自身の問題としてとらえることができるのかは、計画におけるもっとも重要な課題にほかならず、生活環境色彩はこの課題にこたえる有効な概念である。

さらに、地域住民の町並み色彩に対する認識は、往々にして現状の限定されたものにとらわれがちであるが、現状とはまったく異なるものが過去には形成され、時代によって変化してきた生活環境色彩は、このような住民の認識を改めさせ、これからの町並み色彩のあり方について住民のイメージを広げ、豊富化する上で大きな役割を果たすものと考えられる。もう一つは、生活環境色彩が、個人の生活や意識の表現であると同時に、地域の歴史や文化の表現でもあるという性格をあわせもっているために、個々の建物の色彩の選択、決定行為を個人の利己的、独善的な表現に陥らせることなく、町並み全体にとってプラスになるように方向づける構造を内包していることがあげられる。

計画は三つの軸に、「創造力」をくわえたベクトルの場をとらえる。建物や町並みを再発見する美しい、魅力的な色彩の在り方を探るものである。ブルー・タウトやルイス・バラガンの建築色彩の創造力、キンセールのような類を見ない町並み色彩をつくりだす創造力こそが重要である。個人や集団の優れた想像力とは「発見的方法」であり、風土や社会、歴史への洞察力を前提とするものであると考える。

色彩の計画は住民、コミュニティとともにである。住民、コミュニティの喜び、誇りとなる町並み色彩の計画づくり、その実践である。色彩には力がある。コミュニティの町並みにおいて、ある状況下では特別な力を発揮する。建物を創造的な色彩で塗り替えることで、人々が忘れていた街に対する思いを取り戻す力がある。

5. 主な発表論文等

〔雑誌論文〕 計0件

〔学会発表〕 計0件

〔図書〕 計1件

1. 著者名 柳田良造、森下満	4. 発行年 2020年
2. 出版社 株式会社学芸出版社	5. 総ページ数 214
3. 書名 色を使って街をとりもどす	

〔産業財産権〕

〔その他〕

-

6. 研究組織

氏名 (ローマ字氏名) (研究者番号)	所属研究機関・部局・職 (機関番号)	備考
---------------------------	-----------------------	----

7. 科研費を使用して開催した国際研究集会

〔国際研究集会〕 計0件

8. 本研究に関連して実施した国際共同研究の実施状況

共同研究相手国	相手方研究機関
---------	---------